

翁長以清氏の学童疎開関係資料

【学童疎開関係資料】

- 1 「宿舎日誌集録（一卷） 学童疎開宿舎 楠寮」
昭和19年8月15日～昭和19年12月31日の日誌
- 2 「宿舎日誌 昭和20年1月以降 学童疎開久茂地校」
昭和20年1月1日～4月4日の日誌
- 3 「宿舎日誌 昭和20年4月以降 楠寮」
昭和20年4月5日～昭和20年5月9日までの日誌
- 4 「宿舎日誌 昭和21年3月 永久津宿舎」
昭和21年3月1日～昭和21年11月3日までの日誌

※昭和20年5月10日～昭和21年2月28日は欠。日誌を書いていなかったのか、書いていたが紛失したのかは不明。

【疎開時の移動、流れなど】

参考資料：『那覇市学童疎開体験座談会記録』那覇市，1993

『宮崎県学事関係諸令達通牒 沖縄県学童疎開者名簿』那覇市，1991

1944年（昭和19）

- 8月15日 沖縄県議事堂にて疎開引率者協議会開催
- 8月17日 午前3時学校庭集合し出発式。午前8時に「香島艦」で出航。
※但し、『那覇市学童疎開体験座談会』では、同じ船に乗った上山国民学校引率者、真栄城芳子は「鹿島艦」と述べている。（P.17、19）
- 8月18日 鹿児島着。
- 8月21日 鹿児島から宮崎へ移動。宮崎市江平町の谷口旅館宿泊。
- 8月22日 宮崎青年学校宿舎に入舎。
※『沖縄県学童疎開名簿』によると31人+5人（世話人などと思われる）。
9月からの出席記録も31人（男子21、女子10）となっている。
- 9月9日 疎開児童、宮崎第六国民学校（現宮崎市立江平小学校）に入学。
- 9月12～13日
青年学校宿舎より、宮崎中学校へ宿舎を移転。

1945年（昭和20）

- 7月31日 永久津国民学校（現宮崎県小林市立永久津小学校）へ移動。

1946年（昭和21）

10月21日 宿舎を引揚げ、旅館で2泊。

10月23日 小林駅発。鹿児島県の仮収容所へ宿泊。

10月25日 DDT、身体、衣料消毒。種痘、コレラなどの予防注射実施。

10月31日 鹿児島から出帆。

【資料の概要】

毎日の日誌として、時局・出席簿・訓育・学習・養護などの項目がある。「時局」の項は大本営発表の他、翁長氏が新聞の記事を読んで書かれたと思われる。

「出席」は、2年生～6年生まで、31人の出席簿（途中、4人が家族に引取られ最終的には27人となっている）。外泊などがあれば事故として記入。

「訓育」は、この日の指導した事や学校での行事が記入されている。

「学習」はこの日学校で行った学習事項が記入されている（主に戦後）。

「養護」は、病気や怪我人などの病名・氏名、また献立も細かく記入されている。

【資料から分かること】

1 時局

大本営発表の詳細な記事が書かれている。例えば「比島決戦段階に突入」や「米英へ無条件降伏。ヒムラー（ママ）独司令官申入」（S20.5.2）など。また、十・十空襲や、米軍の沖縄本島上陸なども細かく記されている。

対馬丸沈没と十・十空襲、米軍沖縄本島上陸について

時局の項に、「那覇空襲の日」（1944/10/10）とあり、「十月十日七時ごろより十五時三十分の間に四次に亘り敵艦載機延四百機、南西諸島中の沖縄島、宮古島、奄美大島などに来襲せり、所在の部隊はこれら激■その二十大機以上を■墜せり。我方地上及び船舶に若干損傷あり。」（1944/10/12）と十・十空襲について詳細が記されている。

昭和20年3月29日には「沖縄本土への上陸の企図あり」とあり、さらに4月5日「沖縄本島に上陸せる敵は海岸附近に於て相等の被害を受けつつも、其の一部は四月三日北谷南方島袋、及泡瀬附近に進出せり・・・」とあり、沖縄を案じる様子が見て取れる。以降も「痛烈な陣前逆襲 小波津、幸地、前田、仲間進出」など、沖縄の情勢は毎日事細かに記入されている。

1944年9月29日には、沖縄県援護課長浦崎事務官を囲み懇談会が行われたようで、その時は「1、遭難児童に対し慰問金伝達 2、疎開船遭難について 3、疎開と沖縄 4、疎開と社会教育」といった議題で、対馬丸遭難について触れられた事が分かる。

10月17日には児童たちに十・十空襲について報告し、「那覇灰燼ニ帰ス」を知りて」という題で感想文を書かせている（1944/10/17）。※対馬丸には触れず

2 教育者としての翁長以清

出発直前の1944年8月15日に、沖縄県議事堂で行われた引率者協議会のメモには、指示事項：「児童に根本的に打ち込むべき事項」として「引揚は逃避行にあらず。国防・戦力増強への協力なり」とあり、学童疎開児童を率いる責任が感じ取れる。

鹿児島条理後、8月22日に宮崎の青年学校宿舎に入ってから、8月26日には宮崎市長からの慰問金で新聞購読の申込を行っている。日誌には「新聞による教育」と書かれている。

また、「一、言葉 純粋な日本語。疎開は言語修練の場である。」(1944年11/26)や、度々「訓育」の項に、「機敏、純正なる言語、整頓」と書かれており、その都度チェックをしている。疎開先でも引率教師として児童たちを教育していた様子が窺える。

3 学童疎開先の暮らし

① 学校や宿舎での学習や作業など

学習の時間はほとんどなく、1944年ごろは砂利運搬作業や、農耕作業、清掃などが主であった。1944年の10月には初めて「警報発令。児童帰宅」(1944/10/25)のメモがあり、12月には「敵機が来た。」(1944/12/28)、1945年になると、「作業予定なるも、警報のため中止。→敵艦載機当市来襲ありたるも損害皆無。」(1945/3/18)とあり、その後も警報発令が続く(1945/3/18~20、22、27~30)。そのため、児童たちも防空用ガラス張り(1945/4/11)や、「防空壕作り作業のため5年生以下授業中止(六宮校)」(1945/4/14)といった作業を行っている。

また、訓練も多く行われており、退避訓練、防空訓練のほか、夜間訓練などの訓練があった。冬になると「耐寒訓練(5℃)」(1944/12/4)も行われ、行軍(1944/10/28)も1回だけある。

このように疎開先でも戦争の影響を受けていたことが分かる。1945年4月中旬ごろから宮崎市内での警報発令が多くなったことから、宮崎市から離れた永久津へ移動したものである。(実際の経緯、理由は日誌がないので不明)

② 寂しさ

対馬丸遭難の直前に出発しているが、午前1時ごろ「一台音響に寝を破らる」(1944/8/18)とあり、軍に守られながらも不安な船旅だったことが分かる。(※この音に関しては『那覇市学童疎開体験座談会』にもあり)その影響か、到着した次の日に「當間三雄泣く。」(1944/8/19)という書き込みがあり、着いてすぐこれからの疎開生活を案じる児童の心細さが分かる。

③ 寒さ

寒さに関しては、引率教員も気にかけていた事が分かる記述が多い。1944年10月9日には、宮崎市役所より布団11組の貸出があったようだが、慣れない寒さに「伝達：防空態度—就寝時の服装。洋服は枕下におき、厚着をなすこと。」(1944/12/5)、「しもやけ予防にい

【別添資料3】

っそうの注意必要なり。乾布摩擦。掌をこする。水分をよくふきとること。」(1944/12/8)と指導している。また、火鉢もあったようで、「火鉢使用についての注意伝達：目的—仕事をうんとやる。りっぱにやるために火鉢を使うのであって、唯単に暖をとって良い気持ちになるだけが目的ではない。」(1944/12/9)という書き込みがある。入浴に温泉の湯を使用したり、慣れない寒さに苦労していた様子が分かる。しかし、「雪遊び 第一時限 (六宮校)」(1945/1/24)をして、楽しい事もあったようだ。

④ ひもじさ

寒さと同じように、食事にも苦労した様子が窺える。行ってすぐのころは、おやつも毎日ではないが、甘藷やお菓子などがあったようだが、それも徐々になくなっていった。献立は、味噌汁、大根の煮付けや漬物、芋、白菜など。肉が出ることはほとんどない。

「食事糞：無理に喰って下痢せぬこと (1944/11/25)」とあり、子どもたちが食べられるものは何でも食べるというほどの空腹だった様子が分かる。

さらに1945年になると、さらに厳しくなったようで、「切干大根購入。次年度の食糧事情窮屈になるとのことなれば、多数の子をまかない者として貯蔵の準備をなす。本日により米穀節約をも兼ねて、千切切込雑炊を夕食に給す。糧多くして温かし、子等之を好むといへども減り方早ければ、早寝をさす。二、三ヶ月前と食糧事情は趣を多いに異にす。心もとなきことかな。」(1945/2/5)とあり、その頃から、千切大根飯が増えていく。そして、「六宮校、増産作業計画書説明。生産教育」(1945/2/13)、「農耕地整地作業」(1945/2/19)、「午後全員貝狩り。戦果多からず。」(1945/4/13)といった、児童たちも食糧増産のために挑んだ様子が分かる。そんな努力もむなしく「朝食本朝より切込飯廃止。」(1945/4/20)となり、日に日に厳しくなっていった食糧事情が見て取れる。

戦後になると、「白飯支給」(1946/3/5)との記述が出てくるが、多少は食糧事情も良くなったのか？その辺は不明である。(『那覇市学童疎開体験座談会』によると、戦後は配給があったので食事は楽になった、とある。)

⑤ 行事

そんな寒くて、ひもじい疎開の生活でも節目節目の行事は行われていたようである。「休日。中秋十五夜につき、団子を配る。観月。遠足 6年男女—清武へ。5年以下—大淀川。宮崎国民学校よりパンの配給あり。」(1944/10/1)とあり、行事の日には食事も多少は豪華だったようである。1945年ごろになると、おやつはほとんどなくなっているが、この日は端午の節句だからか蒸しパンが出ている(1945/5/5)。

疎開先で初めて迎える正月については、「戦時下の正月について 1、戦時下の正月たること(空襲を念頭に)、2、我々は疎開者であり、集団生活をしていることを顧ること。3、那覇に残った人々の正月を忘れぬこと。4、質実に簡素に感謝を持って正月を迎ふること。」(1944/12/29)と訓示したとある。

⑥ 皇民化教育

苦しい生活に、寮を抜け出す子も何回かあったようだ。それも詳細に記されており、帰ってきたら説諭を行っている。そのようなこともあってか、「全員への伝達 一、虚言せぬこと。誠実であれ。一、宿舎にをれば日本一の小国民になれるが、悪さをして脱出すればその瞬間日本一の悪者になる。」(1945/5/8) という記述がある。

「元旦宮参り 一、祈りに皇室のみさかえ 一、誓いに自分がほんとうの日本人になること。陛下のために命をささげる。」(1945/12/30) という記述や、「皇太子誕生日辰日。皇后陛下の御歌を賜う「疎開児童のうえを思ひて つきのせをせおふべき身ぞたくましく ただしくのびよさとにうつりて」 この歌を、朝夕奉踊することに決定。」(1944/12/22) とあるように、当時の皇民化教育の一旦がうかがえる。

⑦ 終戦後

退避訓練や防空訓練はなくなったが、相変わらず授業などはなかったようで、学習はほとんどが自習。たまに民主主義についての討論会が行われている。また 1946 年 6 月からは、日誌には自習から学習となっているので、この頃から授業が行われたと思われる。

児童たちの作業は、肥料汲山、鶏舎作り、丸太切、白菜やジャガイモ植え、枯葉集め、麦の手入れ、陸稲播種などが主だった。

4 帰 還

「沖縄事務所より公文書。疎開児童調査の件」(1946/3/12)、町役場より公文書着、「昭和 21 年度戦災孤児宿舎予算打ち合わせに関する件」(1946/5/2) などといった文書が送られており、帰還準備をうかがわせる。

そしてついに 1946 年 10 月 22 日に宿舎を引揚げ、旅館で 2 泊。23 日には宮崎から鹿児島へ移動し、鹿児島の仮収容所へ宿泊した。25 日に DDT、身体、衣料消毒。種痘、コレラなどの予防注射実施。10 月 31 日、鹿児島から出帆。2 年以上に渡る疎開生活は終了した。